

↓ジシカ平沢合(一〇:二〇)

↓尾根(一一:三〇)

滑谷奥沢(仮称)

一九八一年八月三〇日

烏川にかかる橋から、旧一三号国

道を滑谷沢合まで約五〇分歩く。

六時三〇分、滑谷沢本流の下降開始。

はじめはゴーロ状であるが、中ごろ

から沢床がグリーンの名メとなる。

滝を三つ程越えて八時、滑谷奥沢(

仮称)出合到着。

すぐ一五分ナメ

滝が現れ、我々を

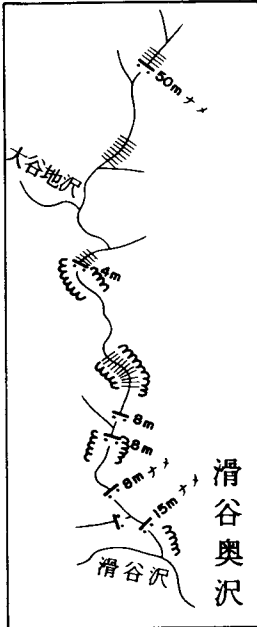
喜ばせる。その先

五分足らずでまた

八分ナメ滝。そし

て二〇分後に、今

度は完全な滝八分。



ここは左岸を直登する。この次の八分もわけなく直登して進む。

五〇分ほどのナメ、四分の滝、小さなナメと過ぎ、ゴーロ状となったところが大谷地沢分岐。ここで相前後して進んできた萩原パーティと別れる。

温帯の代表的な樹木②

ミズナラ(ナラ科)

ミズナラも、ブナと同様、日本温帯を代表する樹木の一つである。ブナのあるところミズナラも必ず存在するといつてよい。樹皮は黒褐色で、縦に規則な裂け目があり、樹高は三〇分近くになる。

材は建築材や器具材として広く使用されている。変わったところでは、ビールの樽材としても使用されている。

薪炭材としても多く使用されていたが、材の中に水分が多く、燃えにくい。名前はこんなところからついたようである。

(大西)

ナメが続く。右岸に支流を分けた所にかかる五〇分トイ滝を越えると、水量は極端に減り、一部は伏流となつてゐる。

一〇時四五分、沢に別れを告げ、

枯松沢右俣

L

一九八四年七月二一日

烏川林道より枯松沢の出合まではオートバイを使用する。林道のゲートがしまつても、車と違つて、通り抜けが可能だからである。出合まで約二〇分。

フェルトシューズを履き、さつそく遡行を開始する。割と広い沢幅で、ナメもあり、快調な出だし。

一〇分程歩くとF1五分の滝にぶつかる。ナメ状で、ヌルゴケが付い

稜線をめざす。(記)

「タイム」 滑谷奥沢出合(八:〇〇)

↓大谷地沢出合(九:三五) ↓終

了(一〇:四五)

ているので、フリクシヨンがきかない。木の枝に助けてもらう。このあとF2まではあまり変化のない河原歩きとなる。

F2から中枯松沢出合まで、小滝がポツポツと出始まる。どうやらこの沢は当りか?と思わず顔がニンマリ。

中枯松沢出合からは、小滝とナメが連続して出てくる。この辺は、ヌ

ルがついていて、ワラジを履いている和泉さんもかなり苦労している様子。フェルトの僕は、もっと苦労してしまう。

九時二五分、この沢を二つに分ける分岐に着く。ここで右俣と左俣の様子をうかがう。右俣に比べ左俣の水量が少ない。それに加えて右俣にはいきなり滝が出ていたので、下降のことを考え、右俣を遡行し左俣を下降とする。

右俣を遡るとすぐに四分、五分、四分と滝が続く。いずれも直登。この辺から沢が急になってきて、沢幅もぐつと狭くなる。後はもう五分級の滝と小滝の応酬である。

F9の八分を最後に滝は姿を消してしまうが、依然として沢は急である。一〇時二〇分、とうとう水は涸れてしまう。ヤブをこいで一〇時二